



窮理の部屋 126

夢見蛤

蜃気楼というと春の富山の風物詩で、遠くの景色が上に伸びたり、一部が上下反転して見える現象です。物理的には、下に冷たい空気の層、その上に暖かい空気の層があると、冷たい空気の方が屈折率が高いため、光が屈折することで見える現象です。

では、どうしてそんな現象が富山で見えるのか…ということについては、長らく、立山連峰の雪解け水が海に注ぎ、海水温が低いためにその上の空気も冷やされて…と言われてきました。しかし、市瀬和義(元富山大学教授)、木下正博(富山県総合教育センター)らの研究により、富山県の魚津から生地方面に見える典型的な蜃気楼は、海の上を通ってきた冷たいままの空気層の上に、陸地の上を通って暖められた空気が載り、このような2つの空気の層ができることが明らかにされてきました。しかし、蜃気楼は富山県の魚津だけでなく、大阪湾や琵琶湖畔、猪苗代湖畔、小樽など北海道の数ヶ所でも見られるのです。では、それぞれの場所でどのようなメカニズムで蜃気楼が発生するのか…という気象の面では、まだすべて解明されたわけではないのです。

でも、そんな科学的なことがわかる前は、蜃気楼はどのように考えられていたのでしょうか。今回は窮理(物理)からちょっと離れてしまいますが…。

そもそも「蜃気楼」という名前は、「蜃」が「気」を吐いてできた「楼」閣という意味でつけられた名前です。「蜃」というのは生き物の名前で、楼閣は建物のこと。つまり、蜃気楼は生き物が吐いた気からできた建物だと考えたのです。

ではその「蜃」という生き物は、いったいどのようなものだったのでしょうか。一般的には、「蜃」は「大はまぐり」と言われることが多いのですが、実は全く異なる2種類の生き物が「蜃」と呼ばれていたのです。ひとつは、上に書いた「大はまぐり」で、もう一つは「蛟(みずち)」という龍の一種なのです。

江戸時代の百科事典ともいえる和漢三才図会という本にも、「龍蛇類」という龍や蛇を扱った項目(架空の生き物と実在の生き物が混在していますが…)の中

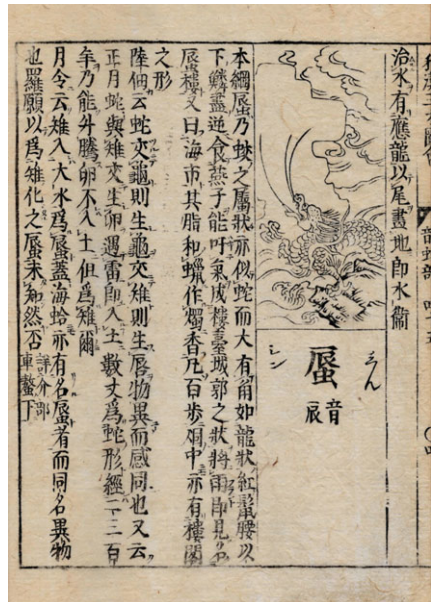


写真1. 和漢三才図会龍蛇類より

に、「蟹」という項目があり、「蟹は蚊の属である。…よく気を吐きて、楼台城郭のさまを成す。」と書かれています。また、「介貝類」という貝類を扱った項目には、「車螯(わたりがい)」という項目があり、「車螯は大蛤なり。…このものよく気を吐きて楼台をなす。」と書かれています。なお、「大蛤を総じて蟹という。もっぱら車螯を指すのではない。また、蚊の蟹と同名であるが異なるものである。」とも書かれています。つまり、「蟹」には「蚊の蟹」と「大はまぐりの蟹」があって、どちらも蟹気楼を起こす生き物であるということが書かれています。

でも、おそらく最初は、どちらか一方の「蟹」が蟹気楼を起こすという話だったのに、たまたま名前が同じだったために混同されて、どちらも蟹気楼を起こす…となってしまったのではないのでしょうか。だとすると、そもそもどちらの「蟹」が蟹気楼を起こしたのか…はよくわかっていません。ただ、(口から)「気を吐く」ということを考えれば、どちらかという龍の一種である「蚊」の方がぴったりしているように思うのですがいかがでしょう。また、シャコ貝の一種で「シャゴウ(車螯)」という貝がありますので、「大はまぐり」の「蟹」は伝説上の生き物ではなく、単に大きな二枚貝の総称だと考えるとすっきりすると思いませんか。

ただ、「蚊」が気を吐いて楼閣…という絵柄は見かけませんが、「大はまぐり」が気を吐いて楼閣ができたという図案はよくあるのです。二枚貝から漫画の吹き出しのようなものが出て、その中に建物が描かれているというデザインで、「夢見蛤」などと呼ばれています。

長谷川 能三(科学館学芸員)



写真2. 夢見蛤の図案が使われている皿(左)、器(右上)、根付(右下)